

サッカーと地域の結びつき 1

—ドイツを中心として—

寺 阪 昭 信

The Impact of German Professional Football Team on their Cities

AKINOBU TERASAKA

キーワード

クラブ, プロサッカーチーム, ヨーロッパ, ドイツ, デュースブルグ, 都市, グランド

1 はじめに サッカーの盛んな国と地域・都市

ヨーロッパ諸国ではどこの国においても最も人気のあるスポーツとしてサッカーが定着している（フットボールのほうがより一般的な用語ではあるが、日本においてはサッカーとして定着しているのをこれを用いる）。どんな小都市にもサッカーチーム・クラブがあり、いたるところにサッカーグラウンドがある。近代のサッカーはイギリス、正確にはイングランドを母国として始まり、ラグビーと分かれてルールが統一されてきた（1848年）。そしてイギリス人を通してその植民地のみならず世界中に普及していったといわれている。日本においてもイギリス人を通して伝えられ、明治時代に港町、神戸に最初のサッカーチームが作られたと言う（大住1993, 11p）¹⁾。それ以来学校教育に取り入れられて普及していったといわれている。プロサッカーとしてのJリーグは13年という短い歴史に過ぎないが、カップ戦の天皇杯は85回を迎えた（2006年元旦の決勝戦）歴史をもっている²⁾、高校選手権もそれに劣らない歴史を持っている（84回）。オリンピックでは戦前のベルリン大会（1936）に出場して実績を残してきた。欧米から取り入れたスポーツとしては早期に定着したスポーツである。

スポーツの必要性や社会への溶け込み方は国

によってさまざまであり、ときには国の宣伝や威信につながる場合もある。スポーツをどのように捕らえるかについては産業、教育、健康、文化、娯楽といったそれぞれの側面から異なったアプローチが可能である。スポーツを行う人でもプロとアマチュアでは異なるし、アスリートとして極限まで挑戦して世界を相手に戦う立場から個人・仲間と楽しむ人まで幅が広い。また、見物者として娯楽（賭けも含めて）・趣味の世界まで広がり、それらを支える運営組織及び用具や施設を供給する企業・公共団体の立場まで多様である。その広がりには情報産業にも及び、専門の新聞、雑誌、TV（一般のテレビでもスポーツは重要な視聴率の高いコンテンツとなっている）が成立して関連領域の基盤は広い。

ここではサッカーが行われる場としての都市・地域とサッカーチーム／クラブの結びつきを考察しようとするものである。国や地域・都市によってサッカーとそれが属する地域とのかかわり方およびその熱狂の度合いに相違が見られる。かつて、「スポーツと都市」という題で、ヨーロッパで開催されたワールドカップがどこの都市で行われ、競技場が整備されてきたかを検討した（寺阪2004）。結論的には大都市、強豪チームの所在する都市が多く、イングランドとドイツでは工業都市に多いことを明らかにした。本論はそれに対してのいわば続編として、都市とスポーツ、特にサッカーとの関係を考察するもので

ある。その後に得られた資料からサッカーの普及過程と盛んな地域、それを支える地域的な基盤についてサッカーの先進地域であるヨーロッパの事例から考察してみることにする。

使用する資料は代表的なサッカー専門の週刊誌であるドイツのKickerとフランスFrance Football（シーズン開始直前の選手名鑑、チーム紹介および過去の様々なデータが記載されている特別号）である。その他には年鑑類が利用できたし、当大学にスポーツ系の新学部が設置されたために、いくつかの貴重な文献を手にすることができた。

地理学の分野において、サッカーの研究は日本ではいまだ行われていないし、ほかの社会科学でも極めて乏しい。Jリーグについての経営学的な分析が目につくぐらいである³⁾。しかしながら外国では先行研究はそれなりに存在している⁴⁾。そのことはスポーツ、特にサッカーが社会に対して持つ意味の大きさが異なり、地域・都市に密着して重要性和があると考えられているからである。それらの活動の地域的な偏在にまず注目する。ヨーロッパにおいては以下で見えるようにスポーツを行う人々の層の厚さが日本とは異なって低年齢から高齢まで多数に及び、それらを支える組織、レフリーや指導員まで加えると大きな規模になりまたその施設も多い。それにともなってスポーツ用品を供給する産業もグローバル化された大企業となっている。それらの頂点にプロのサッカーチームがあり、国単位のリーグ戦が構成され、さらにはワールドカップを初めとする国際的な試合が大きな意味をもっている。日本の状況もフィットネスクラブが増えて社会人にもスポーツが浸透して少しずつ変わりつつあるが、学校教育の一環としてのスポーツが大勢を占めているわが国とクラブを中心とした地域組織が基盤のヨーロッパ諸国との違いは大きい。

さまざまなレベルでのサッカーのリーグ戦が世界で行われている中ではイングランド（プレミアリーグ）、イタリア（セリエA）、スペイン（プリメラリーガ）、ドイツ（ブンデスリー

ガ1）の4国が最も競技レベルが高いトップリーグと言われている、観客数も多く経営的に規模が拡大したクラブもある。近年の傾向は、1993年のボスマン判決⁵⁾以降EU内の選手については労働者として移籍の自由が認められて国内扱いされることとなり、その影響を受けて有力なチームはEU外の世界各地から優れた選手を集めているし、国により外国人枠は異なるが多くの選手を登録するようになってきた。1998年の中田選手以後、日本人選手もそこへの参加が増えてきた。今回は資料の比較的多く手元にあり、かつまたこの6月にワールドカップが開催されるドイツを中心に検討する。

2 世界のサッカーの状況

主要なサッカー国によっても置かれている状況の違いは大きい。最初に国別のチーム数、クラブ数、選手数を国のサッカー協会ごとに比較してみる（表1）。これは最近初めて出版されたFIFA（国際サッカー連盟）の年鑑2006年版に基づくものである⁶⁾。2006年のワールドカップ出場国のうち主要24カ国をヨーロッパ、アメリカ大陸、アジア、アフリカ（ランク上位2国を入れた）・オセアニアに分けて取り上げて日本と比較してみる。ちなみに2006年4月現在の世界ランクも示してみた（現在の上位10までのランクは全て含まれている）。FIFA⁷⁾への加盟年次はサッカーの普及過程を見るひとつの目安になると思われる。

人口当たりの選手数とチーム数からサッカーの普及度、クラブ数、登録選手数⁸⁾、プロ選手数からサッカーリーグ、スポーツビジネスとの係り方が見えてくる。人口1,000人あたりの選手数を比較すると、ヨーロッパの小国クロアチアがずばぬけて高い数値を示しており、ポルトガルを除くと全体として西ヨーロッパは高く、アフリカ、アジアはおしなべて低い。オランダ、ドイツ、メキシコが高いことが分かり、アジアの中で日本が高いといっても、ヨーロッパで低い東ヨーロッパ並みである。また合衆国

表1 主要国におけるサッカーの状況 (2000年)

	ランク	FIFA 加盟年	総人口 1000人	登録(男子) 選手	非登録(男子) 選手	合計(男女) 選手	選手/人口 1000人当り	プロ選手 人数	プロ/選手	クラブ数	クラブ数/ 人口1000人	チーム数	チーム/ 1000人
チェコ	2	1907/94	10,246	241,235	100,000	587,245	57.3	1,208	0.50	2,000	0.20	3,940	0.38
オランダ	3	1904	16,318	527,900	250,000	1,260,900	77.3	900	0.17	4,050	0.25	58,868	3.61
スペイン	5	1904	40,280	117,438	1,700,000	2,457,654	61.0	1,362	1.16	33,555	0.83	101,906	2.53
フランス	7	1904	60,424	795,596	1,100,000	2,994,423	49.6	1,331	0.17	19,835	0.33	142,600	2.36
ポルトガル	8	1923	10,524	40,169	170,000	291,282	27.7	2,244	5.59	2,530	0.24	10,382	0.99
イングランド	10	1905/45	49,561	1,502,500	1,000,000	3,310,700	66.8	2,500	0.17	42,000	0.85	64,850	1.31
イタリア	14	1905	58,057	361,239	2,900,000	4,042,887	69.6	3,152	0.87	16,123	0.28	63,476	1.09
スウェーデン	16	1954	8,986	123,612	300,000	576,408	64.1	1,500	0.26	3,228	0.36	25,000	2.78
ドイツ	19	1904	82,424	1,318,250	2,281,614	6,256,169	75.9	870	0.07	26,697	0.32	172,716	2.01
クロアチア	24	1992	4,496	28,322	210,000	696,956	155.0	605	2.14	1,186	0.26	3,205	0.71
ポーランド	28	1923	38,626	382,703	380,000	987,561	25.6	1,150	0.12	7,763	0.20	27,107	0.70
ブラジル	1	1923	184,101	275,000	5,500,000	7,033,828	38.2	14,709	5.35	6,000	0.03	20,000	0.11
合衆国	4	1914	293,027	159,928	8,400,000	17,891,977	61.1	6,928	4.33	1,690	0.01	10,945	0.04
メキシコ	6	1929	104,959	208,481	5,000,000	7,431,725	70.8	15,000	7.19	1,493	0.01	20,009	0.19
アルゼンチン	8	1912	39,144	140,000	1,100,000	1,505,467	38.5	2,500	1.79	2,994	0.08	17,826	0.46
ウルグアイ	22	1923	33,392	107,873	85,000	201,785	6.0	1,000	0.93	1,100	0.03	2,000	0.06
日本	17	1929/50	127,333	190,206	2,500,000	3,322,388	26.1	1,120	0.59	700	0.01	28,455	0.22
イラン	22	1945	69,018	251,620	400,000	797,765	11.6	20	0.01	2,535	0.04	16,829	0.24
韓国	30	1948	48,598	2,157	500,000	520,398	10.7	417	0.08	54	0.00	615	0.01
サウジアラビア	34	1959	25,795	6,402	100,000	116,718	4.5	458	0.39	153	0.01	700	0.03
ナイジェリア	12	1959	137,253	35,000	500,000	577,660	4.2	1,400	0.24	365	0.00	1,320	0.00
カメルーン	15	1962	16,063	12,450	75,000	98,950	6.2	450	3.61	720	0.04	3,000	0.19
チュニジア	21	1960	9,974	26,271	45,000	77,533	7.8	311	1.18	552	0.06	1,309	0.13
オーストラリア	44	1963	19,913	60,000	250,000	389,000	19.5	200	0.05	1,200	0.06	12,000	0.60

資料：Guy Oliver (2005)：Almanack of World Football 2006 より筆者作成

が意外にサッカー大国（ワールドカップ出場数や世界ランク）であるといわれるように、スペインと同じ水準にあることが注目される。しかしプロ選手についてみると（選手総数に対するプロ選手の割合、プロ化率といえる）、メキシコ、ポルトガル、ブラジルがずば抜けて高く、それについて合衆国が高いことも興味深い。ドイツはオーストラリアや韓国と同じ水準で、日本よりずっと低いことになる。多くの選手がヨーロッパなどで活躍しているカメルーンが高いことも分かる。国のプロサッカー市場の規模と外国への選手の流出（輸出と呼んでもよいか）の度合いが絡むが、その分析はここではとりあえず触れないでおく。

クラブ数とチーム数からはヨーロッパが高い水準を保持していることが示されており、オーストラリアもかなりのチームがあることが分かる。クラブ数ではイングランド、チーム数ではドイツが飛びぬけて多い。日本についてはクラブ数がイランよりもはるかに少なく、カメルーンなみであるが、チーム数が比較的多いのは学

校単位のチームが登録されていることによるものと考えられる。韓国は少数のエリート層の強化によって成立しているといわれているが、この数値は確かに一般層への普及が低いことを示している。

人口1,000人当たりのクラブ数を比較すると、ヨーロッパとその他の地域との違いが歴然とする。基本的にはヨーロッパには多くのクラブがあり、様々なレベルの選手がそこに所属していることを示している。クラブの多いイングランド、スペインは0.85であるから5,000人の都市（国により基準が異なるので集落と言う方がより正確か、日本では村レベルの規模になるが）に4つのクラブ、その率（0.2）が低い旧社会主義国の東ヨーロッパにおいても1つは存在することを意味している。そのような高い密度の上に多数のチームが存在するわけであるから、人口1万人当たりのチーム数からみるとヨーロッパのサッカーの盛んな国では小都市レベルにもチームが存在し、大都市では数十から百を超えるチームが存在していることを示して

いる。このような形態のクラブやサッカーチームが存立できる背景には都市（自治体）成立の歴史的経緯と社会のあり方があると思われるが、今のところその点について検討する材料は持ち合わせていない。

ともかく、そのような膨大な数のサッカーチームが存在する土台の上にレベルの高いプロのトップリーグが成立している。近年ではそれが巨大なスポーツビジネスを生みだし、レジャーとしての楽しみを直接的には地元（はそれ以上の意味もある）を中心とした観客に、間接的にはテレビを通して全世界に供給していることになる。

日本がJリーグを協会が上から組織的に指導して地域に根付かそうと努力して、一定程度の成功を収めている。しかしそれほど急激にクラブを増やすことができるわけではなく、ほとんどの地方自治体にクラブ組織が行き渡っているヨーロッパとの差は大きい。サッカーおよびスポーツの層の底辺を拡大しようとすることの困難さを読み取ることができる。

3 サッカーの普及と社会

イングランドで生まれたサッカーはもともと労働者の娯楽として発展してきたといわれている。イギリスでは、今でもスポーツに階級性の色彩が強く残っているので、上層階級が好むクリケットからラグビー、次いでサッカーという順に大衆層に広がっていて、サッカーの社会的地位は高くはなく、あまり知識階級が話題にすることはない。フランスでも地域差があるものの、自転車競技やラグビーの方が上に見られているようであるし、上層階級の話には上がらない。ドイツでも同様な傾向にあってフランスよりは幅広く受け入れられているように見える。それに対して、イタリア、スペインでは女性とはともかく、より広範な人々に受け入れられている。日本では考え難い世界である。別の面から言えばJリーグの会場に女性客、子供連れが多くみられるのは他の国にない誇るべき？特

徴といえる。この現象の社会学的な意味は分析されてはいないと思うが、日本社会の特徴を映し出していることは確かである。ヨーロッパにおいても以前に比べて女性客が少しずつ増えてきてはいるようにみえるが。

サッカーの歴史を見ると、イギリスの上流階級を育てるパブリック・スクールにおいて、教育の一環として開始されたと言われている。それが19世紀後半の70年代になると労働者階級に伝わった。このころから労働時間が以前よりも短縮されて、レジャー時間が生まれてきたという時代背景の中で、主として工業地帯にサッカーが普及していきプロ化が進む。Bale(1976)の研究によれば、イングランドではミッドランド地方に1860年代プロのサッカーチームが成立し、それが次第に周辺部に近接性と都市の階層性を通して拡散し、南に下ってロンドンにたどり着いてそこで急成長したことを示している(図1参照)。確かにノッチングムのNotts Countyが1862年、ストーク・オン・トレントのStoke Cityが1863年と言うのがイングランドで最も早く設立されたサッカーチームと言うことになる⁹⁾。1888年に最初のリーグ戦が開始されたときの参加チームはおおよそリバプール、マンチェスター、ノッチングム、バーミンガムを結んだ線上に含まれる地域であって、ロンドンのチームは参加していない。ロンドンで最初にチームはTottenham Hotspurの1882年である。およそ1880年代までに主要な都市（現在の主要チームが存在する）にプロチームが成立し、19世紀のうちにネットワークとしては出来上がっていた。

現在のロンドンにはトップリーグ（プレミアリーグ）に属するチームが常時6以上存在するというヨーロッパでまれに見るサッカー都市になっている。シーズン中は毎週数試合が行われるということである。またイギリスの大都市（スコットランドのグラスゴーも中村俊輔の2005年の移籍により日本にも紹介されるようになった）では有力な複数のチームが存在して、ダービー戦で盛り上がる。このような都市はヨーロッパではかなり限られていてイタリアの

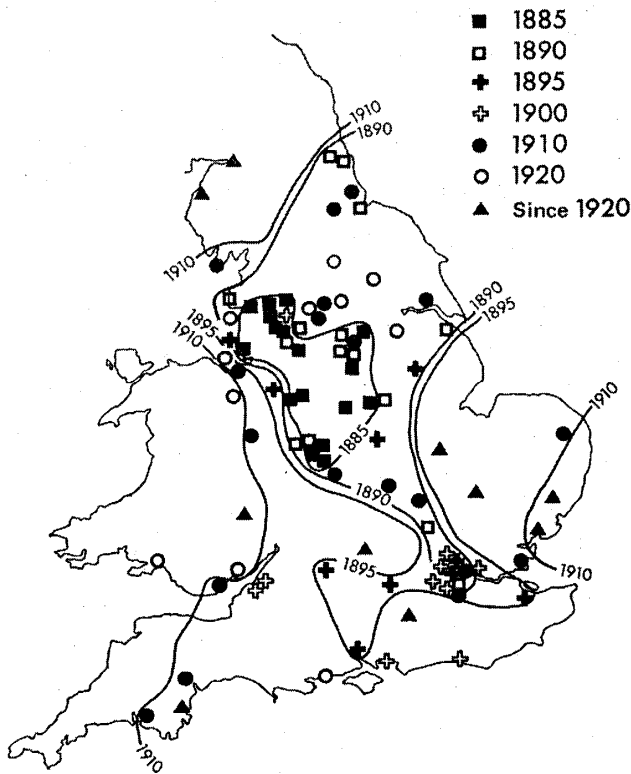


図1 イングランド/ウェールズにおけるプロサッカーチームの展開

出典：J.A.Bale (1978): Geographical Diffusion and the Adoption of Professionalism in Football in England and Wales. Geography p.193

ミラノ、ローマ、スペインのマドリード、バルセロナ、ポルトガルのリスボンとポルトの他にはほとんど見当たらない。フランスやオランダでは考えにくい状況である。

このような展開過程はほかの国でも同様である。最初にイギリス人が伝えたので、イギリス人の居住地区、すなわち港湾などのイギリス人が多い都市に早く伝わった。最初に伝わったのは1880年代のベルギー（アントワープ1880年）である。ドイツではハンブルク（1887年）、フランスではルアーブル（1872年）、イタリアではジェノヴァ（1893年）、スペインはバルセロナ（1899年）という代表的な港湾都市である。そこから大都市、特に首都を経由して人口の多い工業地域の都市に展開して行く。

いつからクラブ組織を整えられてサッカーの普及がどのように進展していったかを検討してみる。サッカー協会の成立年がひとつの目安になるが、イングランドの1863年をかわきりに、

オランダが1889年と早く、ベルギーが1895年、イタリアは1898年、ドイツの1900年と5カ国が19世紀のうちに成立し、スペインは1913年、ポルトガルが1914年、フランスは1919年と南に行くにしたがって遅くなる¹⁰⁾。

他方、世界組織としてのFIFAは20世紀初頭の1904年にヨーロッパの主要国が加盟して成立し、次第に加盟数を増やしていく（表1参照）。第2次世界大戦前はヨーロッパとアメリカ大陸に限られていた。これもまた普及の度合いを反映していると言えよう。

4 ドイツのサッカーの歴史と都市

具体的にはドイツを中心に、ヨーロッパにおけるサッカーの普及と地域・都市とのつながりを見ることにする。ドイツのサッカーは1974年と2006年との2回ワールドカップを開催し、3回優勝したと言う意味では、近年やや陰りが見えるもの（2004年のヨーロッパ選手権で予選リーグ敗退）のヨーロッパ第一級のサッカー大国である。戦後の日本のサッカーはドイツからの指導を経て強化されていった。次章で事例として取り上げる、デュースブルクの施設を利用して練習をつんだ人も多い。第2章で見たようにドイツではサッカーのプロ選手はきわめて少数である。外国のチームに出てプレーする選手も少ないが、一般社会への普及という視点から人口当たりのサッカー選手数で見ると世界のトップレベルにあり、スポーツクラブ（サッカーを行う）、サッカーチーム数も多い。

先に述べたようにドイツの場合も港湾都市ハンブルクにおいて最初のサッカークラブチームが1887年に成立したという（SC Germania Hamburgs 第1次大戦後合併してできた現在のHamburger SVの前身にあたる）。次いで首都のベルリンにチームができる（BFC Germania 1888）。現在まで直接つながる最も古いチームであるベルリンのHertha BSC Berlinは1892年である。ベルリンは1888年から1909年頃までドイツにおけるサッカーの中心地であって多くの

チームが生まれた。1890年代にライプチヒ、次いでライン工業地域、南部のシュトゥットガルト、カールスルーエに広まっていく(図2)。

サッカーそのものは1874年にコンラッド・コッホ校長によってブラウンシュバイクのギムナジウムにおいてイギリスからもたらされたと言う記録がある。しかしながらイギリスからもたらされたスポーツとして体操を中心とした青少年の身体の強化を目的とするドイツのスポー

ツの伝統を破壊するものということで警戒された。軍隊や学校(バイエルン州の学校では1913年まで)では禁止されて社会的にはすんなり受け入れられたわけではなかった。とはいえ1891年に日曜日の労働が禁止されてからサッカーが普及していった。こうして1898年に地域リーグが南部とベルリンで始まり、1903年には全国的なリーグ戦となった。19世紀までにできたチームは23にのぼる(表2)。それらの多くは現在

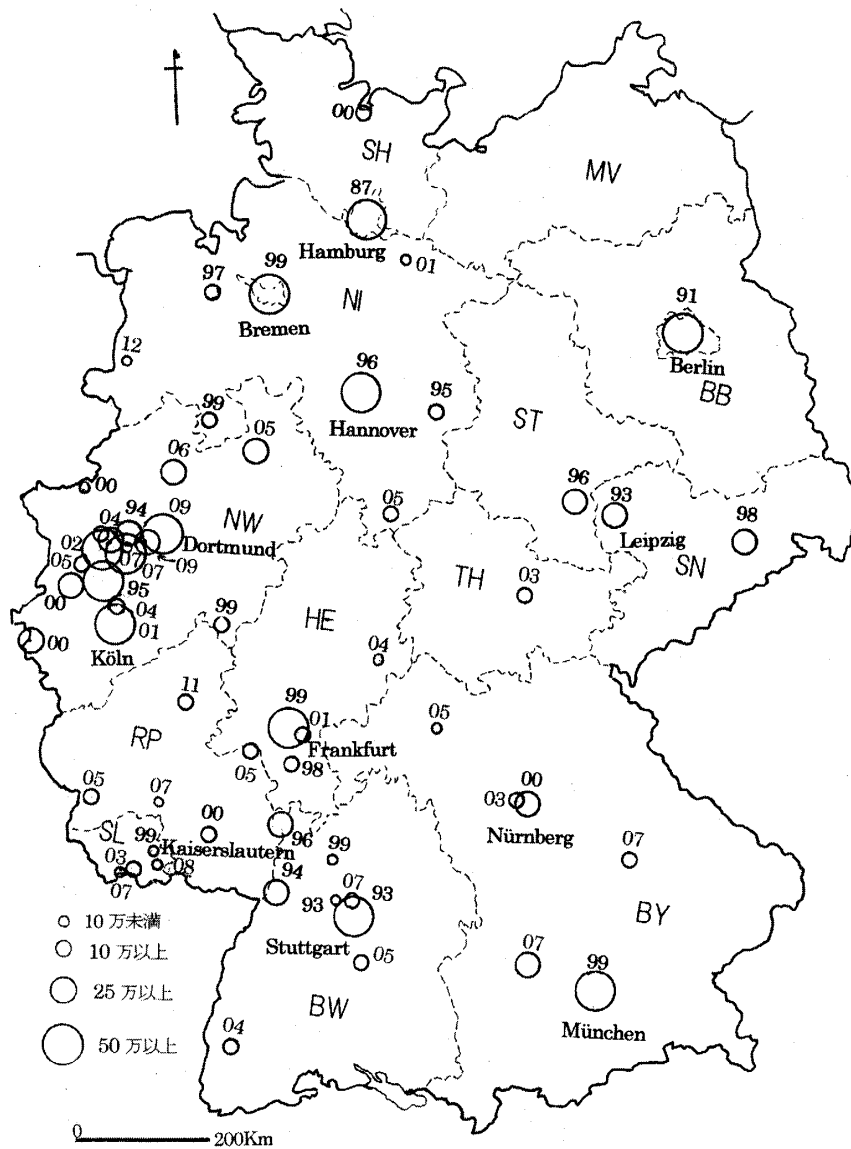


図2 ドイツにおけるサッカーチームの普及過程 第1次大戦前まで

注: 図中の数字は最初にチームが作られた西暦の下2桁を示す。資料はKickerによる現存チームの概略などから作成。都市の人口規模は2002年による。

州の略字は SH: シュレスヴィヒ・ホルシュタイン NI: ニーダーザクセン NW: ノルトライン・ヴェストファーレン HE: ヘッセン RP: ラインラント・プファルツ SL: ザールラント BW: バーデン・ヴュルテンブルク BY: バイエルン MV: メクレンブルク・フォアポンメルン BB: ブランデンブルク ST: ザクセン・アンハルト TH: チューリンゲン SN: ザクセン, 後の5州が旧東ドイツ

表2 ドイツにおけるサッカーの普及過程（第一次世界大戦前まで）

順番	州	都市名	人口1000人	チーム名	設立年
1		Hamburg	1,728.8	SC Germania Hamburg	1887
2		Berlin	3,392.4	Reinickendorfer F chse	1891
3	BW	Ditzingen	24.1	TSF Ditzingen	1893
3	SN	Leipzig	494.8	VfB Leipzig	1893
3	BW	Stuttgart	588.5	VfB Stuttgart	1893
6	NW	Gelsenkirchen	274.9	FC Schalke 04	1894
6	BW	Karlsruhe	281.3	Karlsruhe FV	1894
8	NI	Braunschweig	245.4	TSV Eintracht Braunschweig	1895
8	NW	Düsseldorf	571.9	Fortuna Düsseldorf	1895
10	ST	Halle	239.4	VfL Halle 96	1896
10	NI	Hannover	517.3	Hannover 96	1896
10	BW	Mannheim	308.8	VfR Mannheim	1896
13	NI	Oldenburg	157.4	VfB Oldenburg	1897
14	HE	Darmstadt	139.0	SV Darmstadt 98	1898
14	SN	Dresden	480.2	Dresden SC	1898
16		Bremen	543.0	Werder Bremen	1899
16	HE	Frankfurt am Main	643.7	Eintracht Frankfurt	1899
16	SL	Neukirchen	50.5	SC Neukirchen	1899
16	NI	Osnabrück	164.6	VfL Osnabrück	1899
16	NW	Siegen	108.3	Sportfreunde Siegen	1899
16	BY	München	1,234.7	München 1860	1899
16	BW	Sinsheim-Hoffenheim	35.0	TSG Hoffenheim	1899
23	NW	Aachen	247.7	Alemannia Aachen	1900
23	NW	Bocholt	73.1	1.FC Bocholt	1900
23	RP	Kaiserslautern	99.5	1.FC Kaiserslautern	1900
23	SH	Kiel	233.3	Holstein Kiel	1900
23	NW	Möchenglandbach	263.1	Borussia Möchenglandbach	1900
23	BY	Nürnberg	493.4	1.FC Nürnberg	1900
29	NI	Lüneburg	70.0	Lüneburger SK	1901
29	HE	Offenbach	119.2	Kickers Offenbach	1901
29	NW	Köln	968.6	Kölner B C	1901
32	NW	Duisburg	508.7	MSV Duisburg	1902
33	HE	Egelsbach		SG Egelsbach.	1903
33	TH	Jena	100.5	Carl Zeiss Jena	1903
33	BY	Fürth	111.8	SpVgg Greuther Fürth	1903
33	SL	Saarbrücken	182.5	1.FC Saarbrücken	1903
37	BW	Freiburg im Breisgau	210.2	SC Freiburg	1904
37	HE	Fulda	63.1	SC Borussia Fulda	1904
37	NW	Leverkusen	160.3	Bayer L.everkusen	1904
37	NW	Oberhausen	24.5	Rot-Weiß Oberhausen	1904
41	NW	Bielefeld	324.8	Alemannia Bielefeld	1905
41	NI	Göttingen	123.7	1.SC Göttingen 05	1905
41	NW	Krefeld	239.2	KFC Uerdingen 05	1905
41	RP	Mainz	186.1	FSV Mainz 05	1905
41	BW	Reutlingen	112.1	SSV Reutlingen	1905
41	BY	Schweinfurt	54.7	FC Schweinfurt 05	1905
41	RP	Trier	100.2	SV Eintracht Trier 05	1905
48	NW	Münster	268.9	SC Preussen Münster	1906
49	BY	Augsburg	259.2	FC Asburg	1907
49	HE	Büdingen		SpVgg Elversberg	1907
49	NW	Essen	585.5	Rot Weiss 04 Oberhausen	1907
49	RP	Idar Oberstein	33.2	SC Idar Oberstein	1907
49	BW	Ludwigsburg	87.6	SpVgg 07 Ludwigsburg.	1907
49	BY	Regensburg	128.0	SSV Jahn Regensburg 2000	1907
49	SL	Spiesen-Elversberg		SV 07 Elversberg	1907
56	SL	Homburg/Saar	45.4	FC 08 Homburg	1908
57	NW	Bochum	388.9	SC Wattenscheid 09	1909
57	NW	Dortmund	590.8	Borussia Dortmund	1909
59	RP	Koblenz	107.9	TuS 1911 Koblenz.	1911
60	NI	Meppen	33.9	SV Meppen	1912

資料：Kicker 他 人口は2002年12月 Statistische Jahrbuch 2004による。以下の表も同じ

注：人口の空白都市は2万人未満 現在のドイツ領域に限る。

のブンデスリーグにおいて活躍している。

1900年にドイツサッカー協会が成立して、ナショナルチームが造られた。次第にホワイトカラー層の多い都市に受け入れられていった。F I F Aには1904年最初から加盟した。スポーツクラブは政治団体とみなされて、政府から労働者のスポーツ振興が制限されていた(クリストファー p.36)。1903年から1914年第1次大戦までの期間、12年間ではライプチヒの4回とベルリンの3回、この両都市のチームが強くと、南部のカールスルーエの2回がそれに続い

た。ライプチヒ¹¹⁾は第2次大戦まで、ドイツサッカー協会の本部が置かれていた。現在はフランクフルトにある。

ルール地方には19世紀末から現在の東ヨーロッパ地方から多くの労働者が移住してきた。20世紀初頭にこの地方では労働者を主体とするチームが次々と生まれて現在までつながっている。第一次大戦後、8時間労働制度が次第に普及していくと労働者の世界にサッカーが定着していき、スポーツの観戦を楽しむようになってきた。1934年ゲルゼンキルヘンのシャル

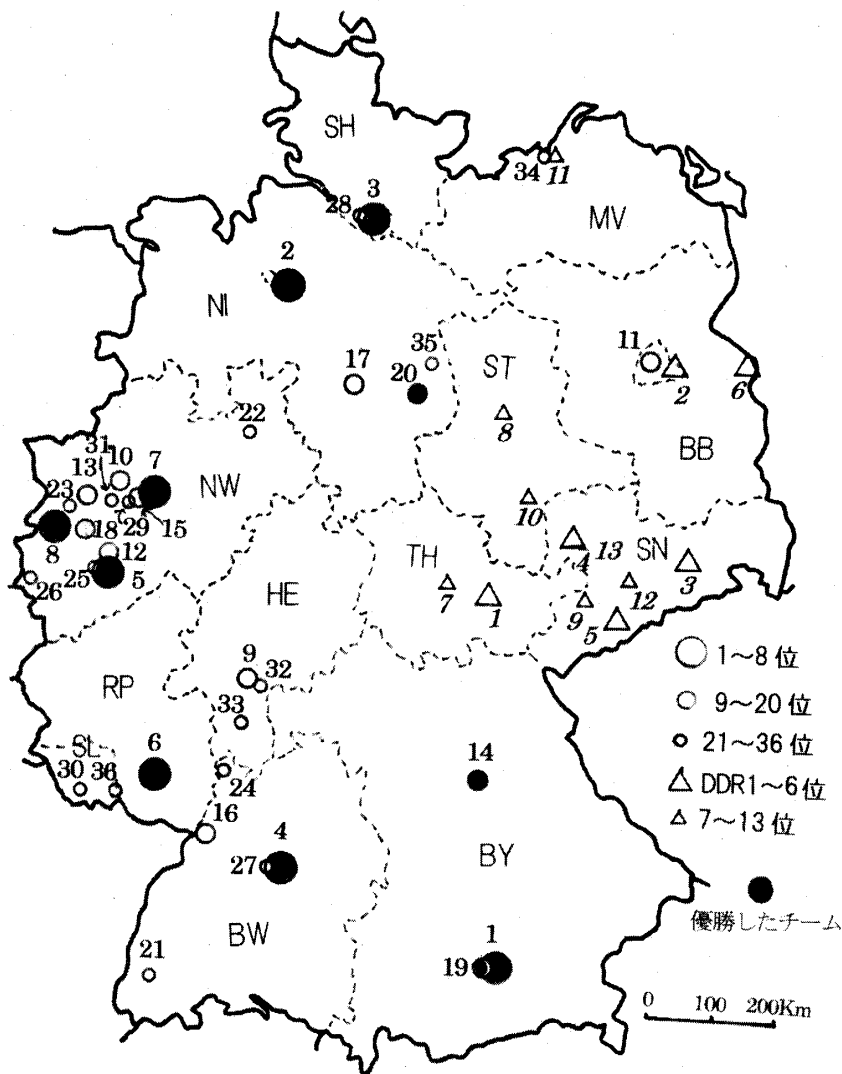


図3 ブンデスリーグおよび旧東ドイツ (DDR) における有力チームの分布

資料：図2に同じ。優勝チームについてはHardy Grüne(2003): 100 Jahre Deutsche Meisterschaft; Die Geschichte des Fußballs in Deutschland. Verlag Die Werkstatt. Göttingen 558p. DDRについてはAndreas Baingo, Michael Horn (2004): Die Geschichte der DDR-oberliga. Verlag Die Werkstatt. Göttingen 351p.による

注：都市の数字は表4-1, 2に対応

ケSchalke04（名前の通り1904年創設¹²⁾、ポーランド出身の炭鉱労働者層から生まれた）がリーグ優勝したことでその傾向が証明された。20年代はニュルンベルクとハンブルクとが強かったが、30年代からはシャルケの6回を始めデュッセルドルフも含めてノルトライン・ヴェストファーレン州のチームが強印象づけられ、その流れは第2次大戦後のブンデスリーガができるまでエッセン、ドルトムントの優勝へと続いていった。

都市の規模¹³⁾との関係を見ると、現在の主要チーム（表4-1の36チーム、主にブンデスリーガ1で戦ったチーム）を見ると19世紀に創設され、残りの大半も第一次世界大戦前の1910年代に生まれている。それらは大都市に多くてベルリン、ハンブルク、ミュンヘンの百万人都市を筆頭に50万人以上の都市のすべてが含まれるのに対して、規模の小さいほうでは、人口10万人未満はザールラント州のホンブルクと10万人をわずかに割ったカイザーслаウテルン（2000年の統計では10万人以上）の存在があるのみである。人口25万人以上の都市でこのリストに現れていないのはアウグスブルク、ヴッパータル、ケムニッツ、ドレスデン、ミュンスター、ライプチヒの6都市にすぎない。この

うちライプチヒは前にも述べたように最初の時期にサッカーが普及した都市であり、旧東ドイツ時代には強かった都市である。またドレスデンは統一されてからブンデスリーガ1部に加わった数少ないチームの一つであり、常連になりつつある都市である。人口10万人以上の規模の都市ではほとんどが、2部以上に所属しているか、いたことのあるプロチームを持っていることになる。

地域別の分布を州単位で見ると（表3）、工業の発達したライン工業地帯を含む大都市の多いノルトライン・ヴェストファーレン州に最も集中しておりブンデスリーガの1/3を占め、次いでバイエルン州になる。これはクラブ数、チーム数、選手数についても同一傾向と言える。しかしながらチームの支持人口という点から見ると、人口が多いので数値は高く必ずしも多いとはいえない。そのような点から言えばフランス国境の規模の小さなザールラント州が最も密度が高いといえる。他方、旧東ドイツ側に少なく下部のレジオナリーガを含めて（72チーム）ベルリンを除くと6チームしかない。中でもザクセン・アンハルト州は0である。

人口当たりの選手数を州別に見るとザールラント、ラインラント・プファルツ、バイエル

表3 ドイツ州別チーム数（2004-05）

州	州都	人口 1000人	Bund. liga	Reg. liga	Ober liga	Verb. liga	計	チーム支持		選手数	チーム数/選手数		選手数/ 人口千人	
								人口,000人	クラブ数		クラブ数	チーム数		
Schleswig Holstein	Kiel	2,816	0	2	5	18	25	112.6	603	4,872	109,470	8.08	22.5	38.9
Niedersachsen	Hannover	7,980	2	3	7	31	43	185.6	2,632	20,330	653,129	7.72	32.1	81.8
Hamburg		1,728	1	2	6	18	27	64.0	321	3,423	108,093	10.66	31.6	62.6
Bremen		662	1	1	0	16	18	36.8	76	1,344	34,808	17.68	25.9	52.6
Nordrhein-Westfalen	Düsseldorf	18,076	12	9	36	64	121	149.4	5,406	33,001	1,422,177	6.10	43.1	78.7
Hessen	Wiesbaden	6,091	1	3	18	49	71	85.8	2,136	12,967	501,627	6.07	38.7	82.4
Rheinland-Phalz	Mainz	4,057	3	2	14	33	52	78.0	2,115	12,113	475,509	5.73	39.3	117.2
Saarland	Saarbrücken	1,065	1	1	4	18	24	44.4	386	2,986	127,720	7.74	42.8	119.9
Baden-Württemberg	Stuttgart	10,661	3	6	18	49	76	140.3	3,159	24,195	960,131	7.66	39.7	90.1
Bayern	München	12,387	6	5	19	56	86	144.0	4,479	29,423	1,352,150	6.57	46.0	109.2
Mecklenburg-Vorpommern	Schwerin	1,744	1	0	4	16	21	83.1	495	2,070	44,027	4.18	21.3	25.2
Berlin		3,392	1	1	7	18	27	125.6	317	2,688	95,985	8.48	35.7	28.3
Brandenburg	Potsdam	2,582	1	0	7	16	24	107.6	726	3,575	100,591	4.92	28.1	39.0
Sachsen-Anhalt	Magdeburg	2,548	0	0	4	15	19	134.1	878	4,628	101,216	5.27	21.9	39.7
Sachsen	Dresden	4,349	2	1	9	16	28	155.3	1,031	6,043	120,040	5.86	19.9	27.6
Thüringen	Erfurt	2,392	1	0	5	16	22	108.7	1,144	3,822	97,429	3.34	25.5	40.7
計		82,536	36	36	163	449	684	120.7	25,904	167,480	6,304,102	6.47	37.6	76.4

資料：人口は2002年、リーグの加盟数は2004-05年度、クラブ数、選手数、チーム数についてはwww.dfb.de/からRegional und Landesverbändeのデータ（2006）

ンという順に高く、ノルトライン・ヴェストファーレン州は高い方とはいえない。北部のシュレスヴィヒ・ホルシュタイン州とともに旧東側が押しなべて低いことは明らかである。

第1次大戦以後、ヨーロッパ諸国ではプロによるリーグ戦が定着していくが、ナチスの台頭はプロ制度を否定し、ユダヤ人チームを禁止した。ドイツにおいてはプロスポーツに対する偏見が強く、プロサッカー組織が成立するのはヨーロッパのなかで比較的遅かった。現在においても完全なプロサッカー選手の数はいくつか少ないのはそのためである。

1950年西ドイツ、52年東ドイツがFIFAに復帰した。西ドイツではサッカーが盛んとなり、1954年のワールドカップ（スイス大会）は奇跡の優勝といわれ、戦後の復興に活力を与えた。その後プロ化が進み全国リーグであるブンデスリーガが1963年に成立して（74年から2部制となる）、サッカー大国の地位を築いていき1974年と1990年にもワールドカップで優勝している。

東ドイツでは（表4-2）サッカーは比較的マイナーなスポーツとしておかれて、政治に利用されチーム名も選手の移動も激しく、地域に密着しているとはいいがたかった。1991年に東西ドイツの統合にともない東ドイツサッカー連盟はドイツサッカー連盟に統一された。その結果として、ブンデスリーガに加わったのは1部で2チーム（ドレスデンとロストック）、地域リーグに6チームしかなく旧東側のチームは少ない。その後もプロ化の波に遅れて、優秀な選手は有力チームに引き抜かれて、旧東側のチームは目立った活躍はしていない。

ドイツのプロサッカーは18チームによるブンデスリーガ1部と2部に分かれている。その下に3部に当たる南（18チーム）と北（19チーム）の2つに分割された地域リーグ（レジオナリーガ）があり、有力チームの下部チーム（アマチュアチーム）が加わっている。その下には州単位に近い規模のリーグ（オーベルリーガ）が組織され、さらにその中で複数に分かれたフェ

ルバンデスリーガ（15～19チーム）がある。そのクラスになるとアマチュア組織になる。それぞれが専用の競技場（小規模なものは収容人員1000人）を持って試合をしている。それらをあわせると684チームになる。ブンデスリーガの有力チーム¹⁴⁾の42年間の実績を示したのが、図3と表4-1である。

ブンデスリーガ1部の試合観客数は2006年のワールドカップに向けて競技場が改修・新設されたために規模が大きくなって収容力が拡大したこともあって近年増加している（1972-73年の501万人を最低として、80年代前半にも停滞したが）。2004-05年の観客動員数は1,0765万人、初年度である1963-65年の590万人と比べると82%増、1試合平均でも24,624人から35,183人へ増えている。定員に対して79%もの席が埋まっている（04-05年度）。これをクラブ別に見るとシャルケ04の97%を筆頭にレーバーク・ゼン、マインツは90%以上、最も低いベルリンが59%である。この関係は会員数の規模の違いと関わっている¹⁵⁾。2部でも合計369万人1試合平均12,074人、51%を集めている（数値はKickers 2005による）。表4-1に見るように上位チームの過半は（20位まで）ワールドカップ開催基準の4万人以上の収容力を持っている。それに比べると、旧東側で最も大きいドレスデンでも3万8千人であるし、3万人を超えるのは半分以下の4都市に過ぎない（表4-2）。

ブンデスリーガが始まってから最初の7年間は毎年異なったチームが優勝していた。70・71と続いてボルシア・メンヘングラントバッハが、次いで3年連続してバイエルン・ミュンヘンが優勝してそれ以降にバイエルン・ミュンヘンが頻繁に優勝しており、05-06年も前年に引き続いて連勝して合計19回に及んでいる。図3に見るように優勝したチームは11と多くはなく、それ以後に新たに優勝したのはハンブルク、ストットガルト、カイザースラウテルン、ドルトムントの4チームしかなく、1995年のボルシア・ドルトムント以降新規のチームはないという具合に固定化する傾向にある。規模の小

表4-1 ドイツブンデスリーガの通算チーム成績 (1963 - 2005)

	クラブ名	都市	人口 1000人	競技場 収容数	会員数	設立年	シーズン数		B1勝点 42年	B2勝点 31年	合計勝点
							B1	B2			
1	FC Bayern München	München	1,234.7	66,000	101,663	1900	40	0	2,609	0	2,609
2	Werder Brneme	Bremen	543.0	42,500	21,000	1899	41	1	2,139	98	2,188
3	Hamburger SV	Hamburg	1,728.8	55,000	25,000	1909	42	0	2,152	0	2,152
4	VfB Stuttgart	Stuttgart	588.5	56,000	30,377	1893	40	2	2,052	133	2,118
5	1.FC Köln	Köln	968.6	50,374	24,500	1948	38	4	1,959	242	2,080
6	1.FC Kaiserslautern	Kaiserslautern	99.5	40,721	10,129	1900	41	1	1,992	68	2,026
7	Borussia Dortmund	Dortmund	590.8	83,000	24,300	1909	38	2	1,948	137	2,016
8	Borussia Mönchenglandbach	Mönchenglandbach	263.1	53,466	27,049	1900	38	2	1,956	116	2,014
9	Eintracht Frankfurt	Frankfurt am Main	643.7	50,300	7,800	1899	37	5	1,745	289	1,889
10	FC Schalke 04	Gelsenkirchen	274.9	61,524	47,906	1894	37	5	1,707	336	1,835
11	Hertha BSC Berlin	Berlin	3,392.4	74,400	12,326	1892	24	13	1,118	729	1,482
12	Bayer Leverkusen	Leverkusen	160.3	47,550		1904	26	4	1,337	236	1,455
13	MSV Duisburg	Duisburg	508.7	31,500	3,900	1902	26	13	1,091	693	1,437
14	1.FC Nürnberg	Nürnberg	493.4	44,306	5,000	1900	24	12	986	750	1,361
15	VfL Bochum	Bochum	388.9	32,645	2,219	1938	30	4	1,228	262	1,359
16	Karlsruhe SC	Karlsruhe	281.3	33,580	3,000	1894	22	13	881	755	1,285
17	Hannover 96	Hannover	517.3	49,000	2,500	1896	17	22	653	1,255	1,280
18	Fortuna Düsseldorf	Düsseldorf	571.9	8,700		1895	22	6	920	311	1,175
19	TSV 1860 München	München		66,000	20,630	1900	20	8	884	510	1,139
20	TSV Eintracht Braunschweig	Braunschweig	245.4	25,000	22,000	1895	20	9	878	472	1,114
21	SC Freiburg	Freiburg im Breisgau	210.2	25,000	2,700	1904	10	17	395	949	869
22	Alemannia Bielefeld	Bielefeld	324.8	26,601	3,627	1905	12	13	457	790	852
23	KFC Uerdingen 05	Krefeld	239.2			1905	14	11	543	617	851
24	SV Waldorf 07 Mannheim	Mannheim	308.8			1907	7	20	285	1,064	817
25	SC Fortuna Köln	Köln				1948	1	26	33	1,376	721
26	Alemannia Aachen	Aachen	247.7	22,500	4,538	1900	3	22	123	1,187	716
27	Stuttgarter Kickers	Stuttgart				1899	2	23	77	1,264	709
28	FC St. Pauli	Hamburg		20,725		1910	7	16	225	886	668
29	SC Wattenscheid 09	Bochum		15,000		1909	4	20	150	1,021	660
30	1.FC Saarbrücken	Saarbrücken	182.5	35,286	1,600	1903	5	18	144	962	652
31	Rot Weiss 04 Oberhausen	Essen	585.5	25,600		1907	7	14	262	713	618
32	Kickers Offenbach	Offenbach	119.2	26,500	1,750	1901	7	11	282	640	602
33	SV Dmstadt 98	Darmstadt	139.0	24,000		1898	2	17	54	974	541
34	FC Hansa Rostock	Rostock	198.3	29,000	2,500	1949	11	3	447	182	538
35	VfL Wolfsburg	Wolfsburg	122.3	30,000		1945	8	7	372	333	538
36	FC 08 Homburg	Homburg/Saar	45.4			1908	3	15	90	841	510

資料：Kicker (2005): Bundesliga 05-06 162p.184p. から作成。

注：合計勝点はB2の勝点をB1の1/2にして合計した数の順位の上位について示した。37位以下では1部に一度も上がったことのないチームが増える。空白欄の人口は再掲のために省略，競技場および会員数は資料に記載なし。

表4-2 旧東ドイツにおけるサッカーの成績 (1949 - 1991)

順位	州	都市	人口 1000人	チーム名	設立年	競技場 収容数	勝点
1	TH	Jena	100.5	FC Carl Zeiss Jena	1966	16,000	1,097
2	BR	Berlin	3392.4	Berlin FC Dynamo	1966	25,000	1,092
3	SN	Dresden	480.2	SG Dynamo Dresden	1953	38,000	1,077
4	SN	Leipzig	494.8	1.FC Locomotive Leipzig	1966	25,000	1,039
5	SA	Aue	22.0	BSG Wismut Aue	1946	20,000	1,018
6	BB	Frankfurt/Oder	68.4	FC Vorwärts Frankfurt	1966	16,000	1,012
7	TH	Erfurt	200.0	FC Rot-Weiß Erfurt	1966	28,000	972
8	ST	Magdeburg	228.2	1.FC Magdeburg	1965	35,000	920
9	SN	Zwickau	100.9	BSG Sachsenring Zwickau	1968	35,000	888
10	ST	Halle	239.4	Hallescher FC Chemie	1966	30,000	874
11	MV	Rostock	198.3	FC Hansa Rostock	1965	28,000	808
12	SN	Chemnitz	252.6	FC Karl-Marx-Stadt	1966	28,000	769
13	SN	Leipzig	494.8	BSG Chemie Leipzig	1950	22,000	733

資料：Andreas Baingo, Michael Horn (2004): Die Geschichte der DDR-oberliga. Verlag Die Werkstatt. Göttingen 351p. による。

さな都市では経営面からも、有力な選手・監督を集めることをも含めて、上位を狙うことが次第に難しくなっているのが現状である。それは会員数という核となる支持層の厚みにも反映されている。シャルケ04を除くと表4-1の10位以下のチームでは多くの会員数が5,000人未満であることでも分かるであろう。

首都ベルリンは第2次大戦後に東西に分割され、西ベルリンは社会主義体制の中の孤島となったことが影響して戦前までの勢いは失われ、ヘルタベルリンが唯一のチームと言うわけではないが統一後の現在でもあまり目立たない状況である。全般に旧東ドイツのチームの現状は存在感が薄い。

5 クラブチームと都市—デュースブルクを例に

次に地域のレベルで、サッカークラブとグラウンドとの関係を見ることにする。そのために、ドイツの制度を概観しておく。

ドイツはプロイセン時代からトゥルネンと呼ばれる体操の伝統があり、スポーツを行う基盤は歴史的に形成されていた。第二次大戦後の国民の健康をまもるために国がスポーツに積極的に関与すべきである考えが認められるようになって来た。その潮流はEU諸国においても1975年にヨーロッパ・スポーツ憲章として市民がそれぞれに適したスポーツを行う権利が明確にされた(高津1996, 200p.)。スポーツ施設が整備されてきたのは1960年にオリンピック委員会によって計画されたゴールデンプランの成立によるものである。高津の研究(1996)によるとこれはスポーツ施設(グラウンド, 体育館, 水泳プールなど)の整備と指導者の養成を公共資金で行うものである。人口当たりの施設水準が定められて、州, 市町村, 国からの資金が提供された。そこにはスポーツクラブが作られて、多くの人々が無料または安い料金により利用しやすい制度をなっている。その結果ドイツのスポーツが一般層に広がりスポーツ人口比が高い(約30%)。要するに、スポーツが一部のエリー

ト層, トップクラスのレベルを上げ, 記録の更新や世界レベルの大会での好成績をねらうためだけではなく, 一般の人にもスポーツが普及し, 生活の中に組み込まれることが目的となった。恐らくそうした厚い底辺層のうえに, スポーツ全体の水準が高められるのであろう。

具体的にはデュースブルクをとりあげる。ここは日本企業のも多く進出している大企業のあるデュッセルドルフのすぐ北に位置し, ライン川とルール川の合流地点にあつて内陸最大の港湾が発達したルール工業地帯の中核都市である。都市の核となる旧市街を南北に挟んだ川沿いに炭鉱を基盤にした鉄鋼業の大工場が発達してきた。ライン川左岸も合併により市域に編入されている。現在は炭鉱も閉鎖され, 操業を停止した工場も多く, 空地も目立つが, それでも人口は約50万人, ドイツの都市人口規模では12位に相当する大工業都市である。労働者として移住してきたトルコ人が多く住む都市としても知られている。

ここには1902年に創設されたMSVデュースブルクというトップチームがある。これは表4-1のサッカーのランクで言えば13位になり, 近年では2部に落ちることも多くなったがブンデスリーガ1部に42年中26シーズン, 2部に13年参入しているがまだ優勝経験のない中堅チームである。その下のリーグではオーベルリーガにMSVデュースブルクのアマチュアチームが加わり, さらに地域リーグであるフェルバンデスリーガ(プロとアマチュアが混ざっている)には2チームが参加している。

ここは日本のサッカーにとっても関係の深い場所である。1960年に東京オリンピックに参加するサッカーチームがこのスポーツシュレで本格的な訓練が行われた。それは中央駅南約1.5kmに位置するジュッド・ノイドルフ地区にあるヴェダウススポーツ公園にノルトライン・ヴェストファーレン州のスポーツシュレがある(図4のAの位置, 詳細は図5)。図5の中で, 道路と南の区境界線に囲まれた森林と池がある広大な敷地(約200ha)にはMSVデュース

ブルクの公式試合が行われる31,500人収容の競技場（都心よりの最北部に位置する）の他に陸上競技・サッカー兼用の多目的グラウンド5面、10面のサッカー場（全部が芝生ではないが）、テニスコート群、体育館、屋内プール、2kmのレッガッタ場があり、研修施設とともに宿泊と飲食施設が整っている。スポーツシュレは様々なスポーツの研修・合宿、会議がおこなわれ、いろいろのレベルにおけるスポーツ人口の拡大、指導が行われる場が提供されている。その立派な施設を最初の見たときに川淵三郎チェ

アマンが感激し、いつか日本で芝生のサッカー場を作りたいと言う夢を育んだといわれている。

MSVデュースブルク事務所と練習場は約6km離れたルール川の北側、ミッテル・メイデリッヒ地区にある（図4のBの位置、4面のサッカーグラウンドと2つの多目的グラウンドがあり、4,000人のグラウンドで下部チームのオーバーリーグの試合が行われる）。

上記のヴェダウ・トレーニングセンターの他に、市内の各地区にグラウンドや体育館を持つ

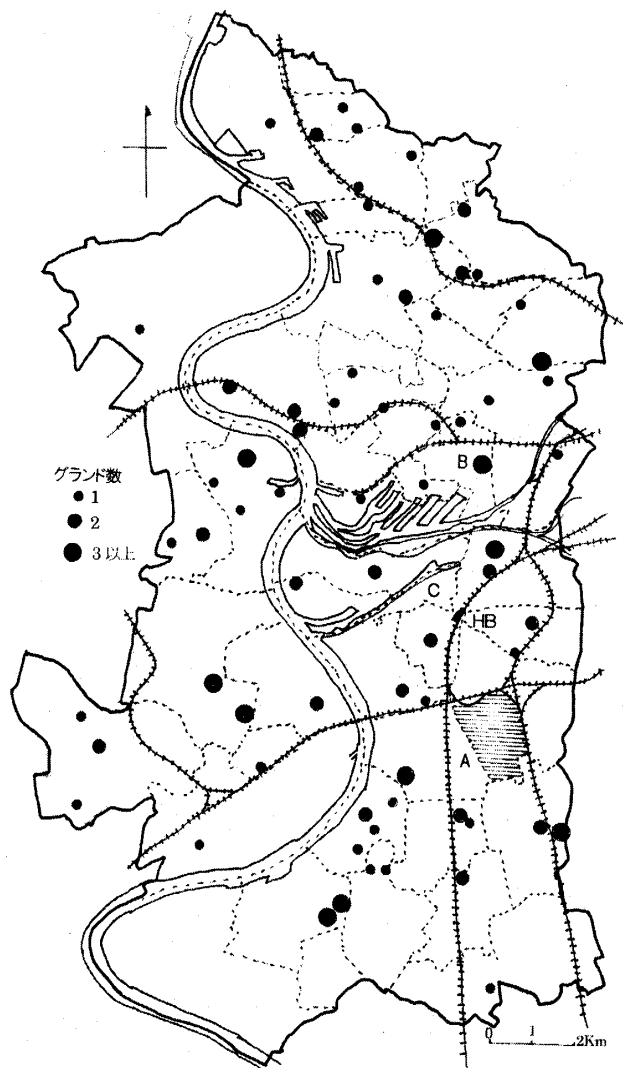


図4 デュースブルク市におけるサッカーグラウンドの分布

資料：Topographische Stadtkarte 1：25,000（1989年版）(Moers, Dinslaken, Duisburg, Düsseldorf- Kaiserswerth), Stadt Duisburg der Oberstadtdirektor: Duisburg Amtlicher Stadtplan 1:20,000, 1991年版, Google satelite から作成

注：A：スポーツシュレと Wedaustadion スタジアム B：MSV Duisburg の本拠地 HB：中央駅 C：都心地区 (Altstadt)

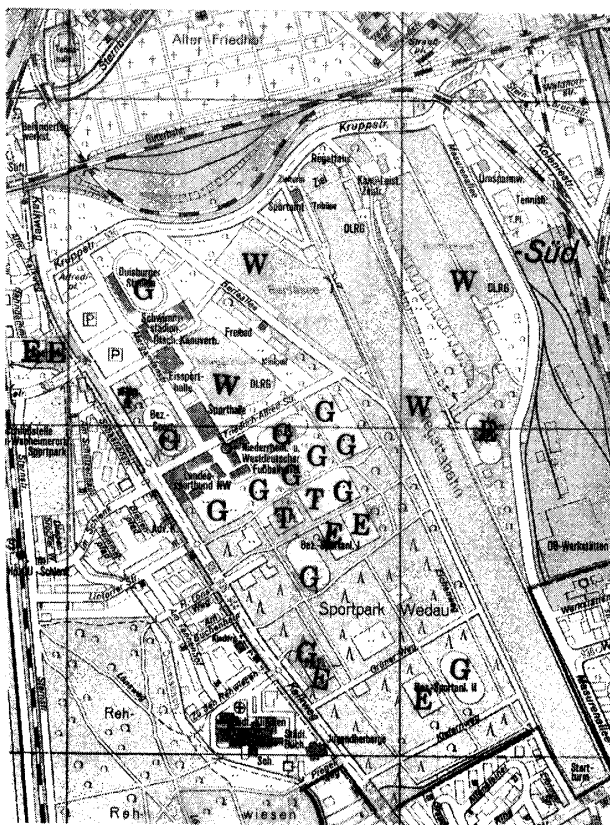


図5 ヴェダウのスポーツシュレ

出典：Stadt Duisburg der Oberstadtdirektor: Duisburg Amtlicher Stadtplan 1:20,000, 1991年版より

注：升目の1辺が1km, G：芝生のグラウンド E：土のグラウンド T：テニスコート群 W：水域 中央が2kmのレガッタコース 最北部のグラウンドが公式試合が行われる収容人数31,500人の競技場MSV-Arena

スポーツ公園が多数設置されている。それらの分布を示したものが図4である。これは市が作成した1991年発行の2万分の1都市図, 1:25,000地形図(1989年), および2003年ごろ撮影と思われるGoogle (<http://www.google.com>)の衛星写真によって地図作成以降の廃止と新設をチェックしたものである。それによるとサッカー場は芝生のものは意外に少なく(約1/3)土のグラウンドが多いことが分かった。都心と工場地区および市域南北両端の農業地区(南北両端の区域)である人口希薄な地区を除くとこれだけの高密度で均等にグラウンドのあることに驚かされる。工業地区周辺の労働者が多くすみ、外国人移住者の多い地区にもグラウンドが整備されている。周囲が緑地の場所もあるが、建物に囲まれた狭い区画に1面だけのグラウンドがある場合も多い。地区別に見ると市内46地区のうちグラウンドがないのは7地区のみである。大部分

の住民は家から1km以内に利用できるグラウンドがあるということになる。

このような高密度のグラウンドが都市部に存在することはドイツでどこまで普遍的なのかはいまのところ検証できていないが、多くのクラブが存在できる基盤であることには違いない。デュースブルクが特別にサッカーの強い、盛んである都市ではないので、これは一般的な傾向といえるのではないかと考えている。

要するに、様々なレベルのサッカークラブチームがあり、試合が行えるグラウンドが多数あり、またクラブはテニス・水泳その他のスポーツなども行えるようになっている。スポーツが地域の生活の中に密着していることがうかがえる。その広く厚い基盤の上に立って、プロのサッカーが成立しているわけで、能力の高い人はプロを目指して、より高いレベルのクラブに入っていくことになる。

(続く)

注

- 1) 大住 (1993) によると1873年東京築地の海軍兵学校にイギリス軍人から伝えられたと言う。
- 2) 2006年元旦の決勝戦が85回大会となる。この前身は1921年に始まる。日本でサッカーのトーナメントが行われていると知って、カップが1919年にイングランドの協会から寄贈されたことに由来する (大住, 同上)。これもイギリス (イングランド) がサッカーの普及に関心を持っていたことの証拠である。天皇杯という名前になったのは31回大会 (1951) から。
- 3) 初期のJリーグについては高橋義雄 (1994) 『サッカーの社会学』NHKブックスがあり、近年では広瀬 (2004) 『Jリーグのマネジメント』が本格的に分析された最初のものといえる。
- 4) Loïc Ravenel (1998)の文献はアヴィニオン大学に提出した学位論文の一部である。この書はサッカーチームの立地と空間展開の部分のみであるが、まえがきによれば観客層、プロ選手層の地域との関わり、公共投資についても分析したとのことである。
- 5) ポスマン判決はベルギーのクラブ・リエージュの選手であったポスマンが移籍を求めて裁判を起こして移籍の自由を勝ち取った。ローマ条約の労働者の移動の自由に違反するとしてである。これ以降選手の報酬が高騰したといわれる。
- 6) FIFA(2005):Almanack of World Football 2006, Headline
- 7) 1904年にフランスの主導によって組織され、イギリスではないことに注目。主なスポーツ団体の中では体操1881, 射撃1887, ボート, スケート1892, 自転車1900に次いで早く組織された (R.Thomas(1991): Histoire du sport. Que sais-je 337, p.84)。
- 8) 選手総数には女子も含まれる。女子サッカーの普及度はかなり国により異なるので、厳密には男子のみで比較しなければ正確ではないが、便宜的に年鑑の数字を使用した。
- 9) 現存するチームのデータからの判断である。Rothman's Football Yearbook 2004による。
- 10) Guy Oliver (2005): Almanack of World Football 2006.による。
- 11) ドイツの再統一以後有力なチームはないが、旧東側から唯一2006年の会場に指定され、組合せの抽選も行われたのはこのような伝統からと思われる。ついでに述べれば、現在ニュルンベルクのチームは目立った成績を残していないが、歴史的には優勝回数の多い (第1次大戦後から9回) 名門であることが、2006年のワールドカップの会場になったといえる。
- 12) 文献、資料により年次とチーム名は必ずしも一致しないことがある。
- 13) 本来は20世紀初頭の都市人口で検討しなければいけないが、当面それを見る機会がないので、現在の人口規模で考察する。
- 14) 表はKicker : Bundesliga 05/06 (2005発行) による過去のシーズンの総得点から2部の得点を1部の1/2にして、総計を示したものである。その上位を図示した。B 1とB 2の合計が42に満たないのは下部のリーグに降格していたことを意味する。
- 15) 会員数は必ずしも地元都市とは限らないから所在地の人口と単純には比較できないが、シャルケのあるゲルゼンキルヘンは破格に高い (17.4%)。バイエルン・ミュンヘンになると全国、あるいはインターナショナルなファンを獲得しているので桁違いに大きい。それでも単純にミュンヘンの人口比でもって計算しても8%に過ぎない。

参考文献

- クリストファー・ヒルトン著, 野間けい子訳 (1995): 欧州サッカーのすべて 大栄出版
- ジョン・ベイル著, 池田勝他共訳 (1997): サッカースタジアムと都市 体育施設出版
- アラン・コルバン著, 渡辺響子訳 (2000): レジャーの誕生 藤原書店
- ウルリッヒ・ヘッセ・リヒテンベルガー著, 秋吉香代子訳 (2005): ブンデスリーガドイツサッ

カーの軌跡 Basilico

FIFA (2004): フットボールの歴史—FIFA 創立100
周年記念出版 講談社

大住良之 (1993): サッカーへの招待 岩波新書
316 岩波書店

高津勝 (1996): 現代ドイツスポーツ史序説 創文
企画

寺阪昭信 (2003): スポーツと都市1—ヨーロッパ
のワールドカップ開催都市 流通経済大学論集
38-1 47-58 p.

(2004): スポーツと都市2—ワールドカップ開
催都市と競技場 流通経済大学論集 38-3
35-45 p.

(2004): スポーツと都市3—ドイツ, イタリ
ア, スペイン諸都市のサッカー競技場 流通経
済大学論集 38-4 21-38 p.

広瀬一郎 (2004): 「Jリーグ」のマネジメント
東洋経済新報社

J.R.Bale (1978): Geographical Diffusion and the
Adoption of Professionalism in Football in England.
Geography 63-3 pp.188-197.

Andreas Baingo, Michael Horn (2004): *Die Geschichte
der DDR-oberliga*. Verlag Die Werkstatt. Göttingen
351p.

Guy Oliver (2005): *Almanack of World Football 2006*.
Headline Book Publishing. London 1042p.

David Goldblatt (2003): *Football Yearbook 2003-4*.
Dorling Kindersley, London 528p.

Hardy Grüne (2003): *100 Jahre Deutsche Meisterschaft;
Die Geschichte des Fußballs in Deutschland*. Verlag
Die Werkstatt. Göttingen 558p.

Terry Platt ed.(2005): *Match of the Day Football
Yearbook 2005/2006*. BBC London 512p.

Loïc Ravenel (1998): *La Géographie du football en
France*. PUF. 143p.